

今日は降臨節第2主日です。この日曜日は伝統的に「バイブルサンデー」（聖書の日曜日）と言われて、1年の中でも、聖書が私たちに与えられたことを感謝し、そのことの意味を改めて考えることになっています。

どうしてこのような日が設定されたか、その根拠を探ってみると、イギリスで聖公会が、カトリック教会から分かれて、今から474年前、1549年、自分たちの礼拝用の祈祷書、第1祈祷書を作った時にさかのぼります。ちなみのこの1549年という年は、日本にフランシスコ・ザビエルがキリスト教を伝えにやってきた年でもあります。ヨーロッパにプロテスタント教会が増えて、勢力が弱くなったカトリック教会が、ヨーロッパ以外の外国に勢力を伸ばそうとしたのと呼応して、印象深い年でした。

その、第1祈祷書には、降臨節の4つの日曜日に、それぞれテーマがあって、第1主日「キリストが与えられたことを感謝する」、第2主日「聖書が与えられたことを感謝する」、第3主日「聖職が降誕の備えをする」、第4主日「再臨への備えをする」、というふうに、お祈りの課題ができたのです。

これを受けて英国聖書協会は、毎年降臨節の第2主日を「み言葉の主日」＝「聖書の日曜日（バイブル・サンデー）」として、すべての人に福音が伝えられるようにと全世界に広めてまいりました。

その名残が、文語祈祷書の、降臨節第2主日の特禱に残っていました。口語の特禱では消えてしまって、そのお祈りは、今の祈祷書では134ページの「44. 聖書を読む前の祈り」という形で残っています。一度読んでみましょう。

「わたしたちを教えるために聖書を記させられた主よ、どうかこれを聞き、これを読み、心を込めて学び、深く味わって魂の養いとさせてください。また、み言葉によって強められ、耐え忍ぶことを習い、み子によって授けてくださった限りない命の望みを抱き、常にこれを保つことができますように、み子イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン」

おそらく、聞かれたことがあると思います。

それで、今日は、「御言葉によって生きる」ということを話そうと思います。

皆さんは、「ギデオン協会」という団体があることをご存知でしょう。ホテルに泊まると、テーブルか引き出しに、聖書が置かれています。これは、聖書を普及させようと活動している、ギデオン協会の働きによるものです。また、この人たちは、学校や病院への、聖書を無料で配布する活動をしています。

これは、もうだいぶ昔に聞いた話ですが、学校で生徒たちに聖書を配っている人々の一人が、「これは、パンを水の上に投げるようなものだ。」と言われたそうです。それを聞いた人は、聖書をあまり読んでいなかったの、ピンとこなかったようですが、「パンを水の上に投げる」という言葉だけは覚えていたそうです。実は私もその時は、知らなかったの、調べてみると、ありました。

「あなたのパンを水の上に投げよ、多くの日の後、あなたはそれを得るからである。」旧約聖書の中にある、伝道の書11章1節の言葉でした。現在私たちが読んでいる、新共同訳聖書では、伝道の書とは言わず、「コヘレトの言葉」と言っているのですが、それには、「あなたのパンを水に浮かべて流すがよい。月日がたってから、それを見いだすだろう。」と書かれています。

ユダヤ人にとってのパン、というのは、私たちの生活に欠かせないコメと同じくらい大切な食べ物です。これがないと、飢え死にしてしまいますから、夜に友人が訪ねてきて、パンがない時、隣の人に、パンを分けてほしい、と頼むたとえ話がありましたね。

その、大切なパンを、「川の流れている上に、投げたしまえ。」という教えです。

このパンを、魚のえさのように考えて、「川の上に投げることによって、たくさんの魚が取れる」という風に解釈する人もいるのですが、この聖句の後半は、「多くの日の後」とか「月日がたってから」という言葉が出て来るので、パンを投げた時に、すぐ効果がある、というわけではないのでしょう。

しかし、大切なものを、投資することで、後になって、大変な報酬がある、という教えです。

最近、毎月の聖書の綴りの詩編解説を書いている榎本保郎という牧師さんは、こんな話をしています。

彼が神学生の時、牧師に連れられて、路傍伝道に行った。木箱と提灯を持って、京都の葵祭でにぎわっている道に立って、牧師に続いて、彼も通行人に向かって、叫んだが、だれも自分の話など聞いてくれなかった。とても恥ずかしい思いをしながら立っていると、小さな子どもが「アーメン、ソーメン、ヒヤソーメン」と言ってからかった。

その嫌な路傍伝道から帰って、牧師は、「感謝祈禱会をしよう」と言い出した。そして牧師が選んだ讚美歌は、536番。

- 1 むくいをのぞまで ひとにあたえよ
こは主のかしこき みむねならずや
水の上に落ちて ながれしたねも
いずこのきしにか 生いたつものと

- 2 あさきころもて ことをはからず
みむねのまにまに ひたすらはげめ
かぜに折られしと 見えし若木の
おもわぬ木陰に ひともしや宿さん

報いを期待するのではなく、人に与えなさい。それが神様の、計り知れない御心ではないか。水の上に落ちて 流れて行く種も どこかのきしに、 生えるだろうと思いなさい。表面的なことで 軽率に判断せず、 神様の御心を思って、 熱心にはげみなさい。かぜに折れたように見える若木が 意外にも大きくなって、木陰に人を休ませるのだ。

この歌を歌っているうちに、榎本先生は、自分が恥ずかしくなり、自分の信仰のなさを恥じたそうです。それから20年して、神学校を出た伝道師が、彼の教会に派遣されました。面接して、彼の住所をみると、以前榎本さんが働いていた教会の近くだったので、「20年前にこんなことがあった。」と路傍伝道の話をする、「先生、そのとき、アーメン、ソーメン、ヒヤソーメンと言ったのは、このぼくです。ぼくはあれからしばらくして教会へ行くようになったのです。」と言った。

榎本さんは、あまりにもくすしき神様の御業に、しばらく何も言えなかった。まことに「多くの日の後、あなたはそれを得る」という御言葉をかみしめた、と言うのです。

わたしたちは、路傍伝道はしませんが、社会に向かって、毎月第2と第4の金曜日、午後2時と午後7時、映画会をしています。それに来る人はわずかでも、私自身、その映画をいろんな機会に紹介するようになりました。教会と社会の人々の間に接点を設けようとしているのです。

さて、5年前に出版された聖書協会共同訳の聖書を見ると、コヘレトの言葉11章1節は、

『あなたのパンを水面に投げよ。月日が過ぎれば、それを見出すからである。』というふうに、以前の口語訳『あなたのパンを水の上に投げよ、多くの日の後、あなたはそれを得るからである。』というのに似た訳文になっています。

「流す」のではなく、「投げる」というのは、信仰の積極さを表しているようにも思えます。

この3年間、新型コロナウイルスに振り回されて、自粛生活をする生活が多かったのですが、今度のクリスマスには、パン投げるのではありませんが、プレゼントを用意して、配れるように準備してはどうでしょうか。

教会に入ることは出来なくても、ギデオン協会にならって、み言葉の種を蒔く者でありたいと思います。

今日は、聖書の日曜日なので、御言葉によって生きる、ということを考えてみました。